

スペイン植民地における建築工事制度と技術：メキシコ盆地の事例研究

著者	喜多 裕子
内容記述	筑波大学博士（世界遺産学）学位論文・平成23年7月25日授与（甲第5910号）
発行年	2011
その他のタイトル	Construction system and methods in Spanish colonies : case studies in the Valley of Mexico
URL	http://hdl.handle.net/2241/117881

氏 名 (本籍)	喜 多 裕 子 (青 森 県)
学 位 の 種 類	博 士 (世界遺産学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5910 号
学位授与年月日	平成 23 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	スペイン植民地における建築工事制度と技術：メキシコ盆地の事例研究 Construction system and methods in Spanish colonies: case studies in the Valley of Mexico
主 査	筑波大学教授 工学博士 日 高 健一郎
副 査	筑波大学教授 工学博士 稲 葉 信 子
副 査	筑波大学准教授 博士 (学術) 松 井 敏 也
副 査	東京藝術大学招聘教授 博士 (工化学) モルゴス・アンドラス

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本論文の目的は、メキシコの植民地時代（ヌエバ・エスパーニャ副王領時代、16、17 世紀）の建築を対象として、①首都の代表的宗教建築の建設工事記録を材料調達と施工の視点から分析し、②同時代のスペイン建築の影響を受けて、それまでの建設工事で材料と施工を担った中世ギルド職人にかわって、新たな建築士が技術的制度的に台頭する過程を明らかにし、③メキシコ植民地時代建築では、様式的変革（民族的バロック）に先行して、材料と施工で建築生産の近代化が進行したことを証明することである。

（対象と方法）著者は、メキシコ政府給費留学生として1年間メキシコシティーに滞在し、関連古文書機関で、植民地時代の詳細な史料研究を行った。また、現地調査によって史料の記載やその妥当性を確認し、厳密な研究方法で研究を展開してきた。メキシコ植民地時代の建築史では、様式的観点に偏って既往研究が展開されてきたが、著者は、史料批判を踏まえて、その記述を分析することにより、既往研究では欠落していた建築生産の実相とそれを担った職人・建築士の職能的発展、建設費用の流れの解明を達成している。

(対象と方法)

第1章「メキシコ盆地の組積造建造物の構法と材料」では、様式のみならず構法と材料に注目してメキシコ建築を概観し、第2章「植民地統治機関と建設制度」ではスペイン植民地統治機関の全容と建設制度としてのギルドの変容を論じる。著者が取り上げる史料を職能の成立という視点から分析し、16世紀にギルド制度解体の兆候を指摘する。第3章「出納簿にみる建築工事の工程」および第4章「建設費用の確保」では、精緻な史料研究により、サンフランシスコ修道院付属礼拝堂の建設、サントドミンゴ修道院の再建、チャルコ村教区教会堂の再建に関する工事記録が分析される。特に第4章では、大規模修道院の再建にあたり、国庫および出資先からの建設費用の流れが明らかにされる。この史料研究にもとづき、第5章「建築士の多様化とギルド制の変容」では、植民地期初期の左官のギルドが、建築工事の合理化に伴い建築のギルドへと変容し、同時に建築士の仕事内容や範囲も多様化していった状況が解明される。第6章「建築材料の生産、流通および使用」と第7章「工事現場における制作と施工」は植民地期の工事現場で用いられた材料の生産、

流通および使用を論じる。

(結果)

材料と工事に関する分析および現地調査の結果、16、17世紀のメキシコ植民地建築において、既往研究では取り上げられなかった建設史料を精査することにより、材料の調達と施工の全過程を担っていた中世的なギルド構造がスペイン近世の建築職能成立の影響を受けて徐々に解体し、新たな近代的建築士が誕生するという結論が示される。既往研究の様式論では、植民地時代建築には、それ以前の様式的影響が色濃く残るとされてきたが、それは建築の近代的職能成立の過程から見ると、ギルド職人の残滓であり、建築生産における材料と技術では、早くから近代化が進行し、様式的特徴とされてきた民族的バロック様式は、近代化の表装として存続したに過ぎない、と論じている。

(考察)

文化遺産の保護にとって、その指摘意義の解釈と評価は重要であり、本研究は遺産保護の基礎分野の論考と位置付けられる。特に、文化遺産としての建築の実現を担った建築職人の職能史研究は建築史領域で様式論を越える新しい課題として重視されているので、建築史学会に与える本研究の意義は大きい。また、日本人研究者が少ない中米の文化遺産研究の先駆としても注目される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

研究対象となった三つの建築につき、建設資金の流れ、材料の調達・運搬から始まる建築生産の実態についてきわめて詳細な史料研究を展開し、方法及び内容において優れた論文であると評価できる。特に、既往研究とは全く異なる視点から、建築材料とその運搬法、使用法について出納簿等の古文書を解読分析し、物流と資金の両面から大規模修道院建設の実態に迫った努力は今後の類似研究にとって貴重であり、高い水準の大きな成果であると判断できる。著者は建築材料、特に目地材について材料実験や組成分析実験を準備し、すでに多くの作業を進めていたが、史料研究としての本論文に含めるには困難であり、別途の研究として実施することになった。本論文の成果は、当然、こうした実験的分析にも反映されるべきであり、その点に史料研究としての意義と本研究の将来性があると言える。

平成23年4月28日、博士（世界遺産学）学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと最終試験を行い、論文について説明をもとめ、関連事項について質疑応答を行った結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（世界遺産学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。